

鳥取県八頭郡郡家町

BEFU・SHIMOTSUGURO, HAZIMOMOI

別府・下津黒, 土師百井  
発掘調査概要報告書

1993. 3

郡家町教育委員会

BEFU・SHIMOTSUGURO, HAZIMOMOI  
別府・下津黒, 土師百井  
発掘調査概要報告書

1993

郡家町教育委員会

## 序 文

この発掘調査報告書は、平成4年度の国庫補助事業として実施した本町別府・下津黒地内、及び、土師百井地内における調査記録です。

郡家町内には数多くの遺跡が存在し、過去の発掘調査によって、漸次、文化遺産の貴重な記録が積み重ねられています。近年、各種開発関連事業の増加とともに発掘調査は漸増の状況にありますが、埋蔵文化財は歴史資料として、いろいろな情報提供をするばかりではなく、各種、生活の知恵をも現代人に与えるものがあります。今日、開発と文化財の共存関係は地域文化の発展にとって、年をおって重要な課題ともなっています。郡家町教育委員会では、このような認識のもと、関係各機関との協議を重ね、また、地元町民のご理解をいただきながら、地域発展と文化財の共存を図るよう、文化財保護行政を進めているところであります。

今回の発掘調査も関係各位のご協力によって、無事、所期の目的をはたすことができました。厚くお礼を申しあげる次第でございます。

平成5年3月

郡家町教育委員会

教育長 北村一利

## 例 言

1. 本書は、平成4年度の国、県の補助金を得て郡家町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 今回、調査を行なった遺跡は、鳥取県八頭郡郡家町別府・下津黒の両地内と同町土師百井地内に所在する。
3. 本書用いた方位は、磁北を示す。
4. 遺構名のTはトレンチの略号である。
5. 遺物実測図は $\frac{1}{2}$ である。
6. 本書の執筆・編集は、道谷富士夫があたり、整理作業の全般にわたって若林久雄の協力を得た。
7. 発掘調査によって作成された記録・出土遺物は、郡家町教育委員会に保管されている。
8. 発掘調査の体制は、下記の通りである。

発掘調査主体 郡家町教育委員会 教育長 北村 一利

調査指導 鳥取県教育委員会 鳥取県埋蔵文化財センター

事務局 郡家町教育委員会 社会教育係

調査担当者 道谷富士夫

## 本文目次

序文	I
例言	II
序 郡家町の歴史的環境	1
(別府・下津黒遺跡群)	
I 発掘調査に至る経過	3
II 調査の概要	3
III 小結	19
(土師百井廃寺遺跡)	
I 発掘調査に至る経過	21
II 調査の概要	21
III 小結	36

## 挿図目次

(別府・下津黒遺跡群)	(土師百井廃寺遺跡)
第1図 別府・下津黒遺跡群調査区域・試掘トレンチ配置図	第7図 トレンチ実測図(T 1) ..... 22
トレンチ配置図 ..... 5・6	第8図 トレンチ実測図(T 3) ..... 22
第2図 トレンチ配置図(T 1～T 8) ... 7・8	第9図 トレンチ実測図(T 2) ..... 25・26
第3図 トレンチ配置図(T 9～T 17) ... 11・12	第10図 トレンチ位置・伽藍配置推定図 ... 27・28
第4図 トレンチ配置図(T 18～T 22) ... 13・14	第11図 出土礎石位置図 ..... 29・30
第5図 トレンチ配置図(T 21) ..... 15	第12図 遺物実測図 ..... 31
第6図 遺物実測図 ..... 17	

## 図版目次

(別府・下津黒遺跡群)	
図版1 T 6・10・12・19 出土遺物(1～5)	
図版2 T 21 出土遺物(6～9)	
図版3 T 21 出土遺物(10～12)	
図版4 1. A区 遠景(北より)	2. T 1 完掘状態(北より)
3. T 2 完掘状態(南より)	4. T 3 完掘状態(南より)

図版5	1. T 4 完掘状態（南より） 3. A区 T 6 調査前遠景（北より）	2. T 5 完掘状態（南より） 4. T 6 完掘状態（北より）
図版6	1. B区 遠景（西より） 3. T 7 完掘状態（西より）	2. T 7 完掘状態（南より） 4. T 8 完掘状態（西より）
図版7	1. T 9 完掘状態（東より） 3. T 10 完掘状態（南より）	2. C・E 遠景（北より） 4. T 11・12 調査前遠景（北より）
図版8	1. T 11 完掘状態（南より） 3. T 13 完掘状態（南より）	2. T 12 完掘状態（南より）
図版9	1. T 14 完掘状態（南より） 3. T 16 完掘状態（南より）	2. T 15 完掘状態（南より） 4. T 16 完掘状態（西より）
図版10	1. D区 T 17・18調査前全景（西より） 3. T 18 完掘状態（南より）	2. T 17 完掘状態（南より） 4. D区 T 19調査前遠景（南より）
図版11	1. T 19 完掘状態（南より） 3. T 19 完掘状態（西より）	2. T 19 完掘状態（北より）
図版12	1. T 20 完掘状態（南東より） 3. T 21 完掘状態（西より）	2. T 21 調査前全景（北西より） 4. T 22 完掘状態（南より）
(土師百井廃寺遺跡)		
図版13	T 2 出土遺物（1～4-2）	
図版14	T 2 出土遺物（5-1～6-2）	
図版15	T 2 出土遺物（7-1～7-2）	T 3 出土遺物（8-1～8-2）
図版16	1. T 1 発掘前全景（南より） 3. T 2 発掘前全景（北より）	2. T 1 完掘状態（南より） 4. T 2 出土 磚石（真上より）
図版17	1. T 2 出土 磚石（南より） 3. T 2 完掘状態（北より）	2. T 2 出土 磚石（北より） 4. T 3 発掘前全景（南より）
図版18	1. T 3 完掘状態（北より）	2. T 3 出土 遺物（北東より）

## 挿 表 目 次

(別府・下津黒遺跡群)

第1表 調査トレンチ一覧表

## 序 郡家町の地理的・歴史的環境

源流を鳥取・岡山県境の沖ノ山に発する千代川は、中国山地を北進して、大小70ほどの支流を集め日本海に注ぐ流長57kmの因幡一の河川である。千代川の支川、私都川は流長27km、郡家町の東部扇ノ山（1310m）より発し、郡家町内をN字状の河谷を流下し、下流域に津黒・別府・下私都の谷底平野を形成し、百井・米岡・坂根付近で八東川と合する。八東川は河原・片山で千代川に合流する。津黒・別府の集落は、私都川河岸段丘の低位面に相当し、百井百井は肥沃な冲積面に位置する。津黒・別府地区の南部山地は、非変成の剪断泥質岩層で私都川下流域にかけて分布する鳥取花崗岩の接触変成作用をうけている。

私都川の最下流部の靈石山塊は下層から河原火山岩層、円通寺疊岩砂岩層に蔽われ、津ノ井丘陵の東部及び北部に分布する三代寺シルト岩層と接している。津ノ井粘土はこの岩層の凝灰岩中の粘土である。

私都川流域は古くから遺跡の存在が多く知られたところである。縄文後期の西御門は八東川右岸の冲積地に、万代寺遺跡は私都川の下位段丘上に、弥生時代の袈裟禪文銅鐸、木棺墓群の確認された下坂、占墳時代中期の盟主墳と考えられる御建山古墳の久能寺、稻荷古墳群が知られている。この時代の後期には、私都川下・中流域を望む丘陵斜面には、横穴式石室、石棺を主体とする福本・池田・米岡等の古墳群が群集墳の形態をとってくる。靈石山麓の旧国中。池田村の地域は八上郡土師郷に比定され、白鳳時代後期の法起寺式伽藍配置がみられる土師百井廃寺跡があり、その東方には八上郡衙跡と考えられる万代寺遺跡がある。また、郡家町北緑の峰寺・山ノ上の小山塊を越えれば、国庁、国分寺、国分尼寺跡が存在し、古代因幡地方の政治・経済・文化の中核地域であったことがうかがえる。そして、これらの古墳群、官衙、寺院に供給されていた須恵器の一大生産地としての福地・花原・山田・下坂等の私都古窯跡群がある。

## 別府・下津黒遺跡群

## I 発掘調査にいたる経過

中山間地域農村活性化総合整備事業（別府・下津黒は場整備）に伴う分布踏査は、郡家町産業課・同教育委員会・鳥取県埋蔵文化財センターの三者により事業地域の全域にわたって行なわれたが、さらに、詳細な分布状況の把握を期して、郡家町教育委員会が調査主体となって、事前発掘調査を実施した。

発掘調査は、平成4年4月16日より開始し、6月15日をもって現地調査を終了し、整理、報告書作成は6月17日から7月24日までに完了した。

調査に際して、以下の方々のご協力を得た。厚くお礼を申しあげ、記して謝意を表すしたいである。

調査協力 郡家町産業課

鳥取県埋蔵文化財センター

作業協力 安部信道、福本 司、田潤美道、大野昌之、安部孝子、田中貞子  
田中孝子、和田政子、大平 晃、若林久雄、道谷美賀子

## II 調 査 の 概 要

### 調査の方法と経過

今回、試掘調査の対象となった別府・下津黒地区は、私都川左岸の低位段丘面から猫山北斜面、標高130～190mの山地丘陵面に相当する。私都川の両岸に分布する鳥取花崗岩を基盤とする山地は、花崗岩風化土、いわゆる「マサ」の上に大山及び起源不明の火山灰が堆積した地域で、谷底部は谷奥部に向かって深く開田され、丘陵部は梨園が営まれている。事業の実施される区域は総面積15haに及ぶ広範囲にわたる。

調査区の区割りは、猫山山塊の支稜線ごとに西側からA～E地区の5地区に区分することとした。A地区は別府字牛ノ尾・同汁谷地内に位置し、尾根の東側斜面から須恵器片の表面採取をしたところでもあり、稜線上に墳墓遺構の検出を想定して第1～第5トレンチを、また、住居遺構等を目的とした第6トレンチをこの稜線東側谷奥部の平坦面に設定した。B地区は、古くは神社の存在したといわれる別府字古宮地内の四周を水田にめぐらされた標高170mの独立丘で、概観上、古墳と想定され、また、土地所有者の梨園造成前に西側山裾において、須恵器片の散在がみられたというところから、頂部・西側山腹にトレンチを設定した。C地区は別府字妙見谷・上ミ岡。八斗代地内にある。第10トレンチは、西側に谷川が流れる崖下の平坦地にあたる。第12トレンチは、東西稜線の谷合の平坦部

にあり、生活関連遺構の検出を目的とした。また、第13～15トレンチは南北に延びる稜線上に墳墓遺構等の確認を、第16トレンチは北東に突出する扇状台地に土坑・住居遺構の発見に留意した。D地区は、下津黒字笠岩谷・口浅子地内にある。第17・18トレンチは西側谷底部に谷川があり、花崗岩魂の散在するほど平坦面に墳墓・生活関連遺構を、第19トレンチは墳丘状の地形を呈しているところから、墳墓遺構を、第20トレンチは表面採取による須恵器片の存在と花崗岩魂の散在するところから、墳墓遺構の検出につとめた。E地区は下津黒字向伊地内である。第21トレンチは一見して古墳の石室の一部と推定される平板状の花崗岩が露呈する山腹に、第22トレンチは第21トレンチに近接するところから、土坑・墳墓遺構の確認につとめた。

対象区域は山地に位置し、背稜部は丘陵状に削剥されて梨栽培が行なわれ、地形の変化と土壤攪拌の著しいところから、留意してトレンチ掘削にあたった。A地区では須恵器片、C地区では須恵器・土師器片、石錘、D地区においては、須恵器・土師器片が出土したが、これらの遺物包含層はいわゆる耕土中の上部で採取されたものであった。最終的には、古墳1基の確認にとどまり、他の遺構の検出はできなかった。

調査したトレンチについては、平面図及び断面図を作成し、写真撮影を行なった。なお、発掘調査のトレンチ総面積は約330m<sup>2</sup>となった。

#### トレンチ調査の概要

##### (1) A区の概要

A区は別府の集落から約300m南側の山地に位置し、対象地区の西側にあたる。猫山山塊の支稜線で東・西両側の谷底部は水田である。開田時、山裾部はかなり切削されて、急傾斜となっている。南北に延びる尾根上に5個所、山裾の畠地に1本のトレンチを設定した。基盤は花崗岩で上部は「マサ」化し、その上に火山灰をのせている。

##### 第1トレンチ（第2図）

尾根の最上部にあたる。表面下10～15cmで固くしまった粘質土に達する。樹園地で土壤が攪拌され、トレンチのほぼ中央に溝状の施肥穴があり、ビニール片、石灰加里の固結物がみられた。遺物・遺構の検出はなかった。

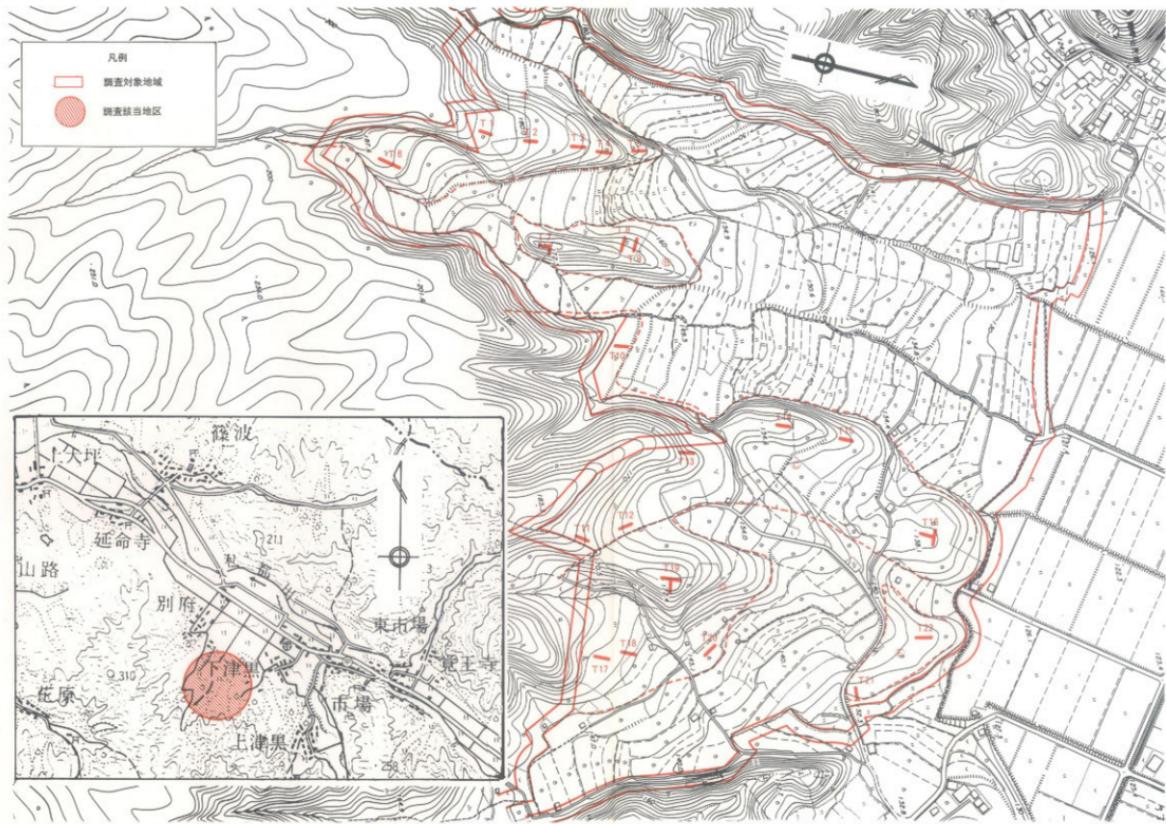
##### 第2トレンチ（第2図）

樹園地で、施肥穴が2個所認められ、ビニール片、スプーン等がみられた。表土中（5～10cm）に土師器の細片2を採取したが、遺構の確認はできなかった。表面下10～15cmで固い粘質土に達する。

##### 第3トレンチ（第2図）

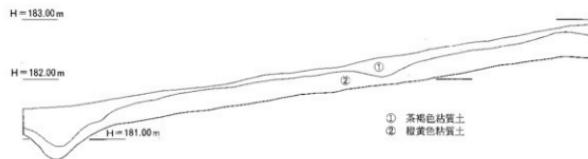
第2トレンチの北側下方にあたる。トレンチ下方は腐植土で地山が欠落しているところから下方に拡げた畠地と考えられる。表面下10～40cmで粘質土に達する。遺構・遺物の検出

第1図 別府・下津黒遺跡群調査区域試掘トレンチ配置図

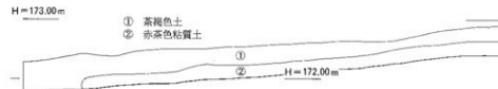


第2図 第1～第8 トレンチ実測図

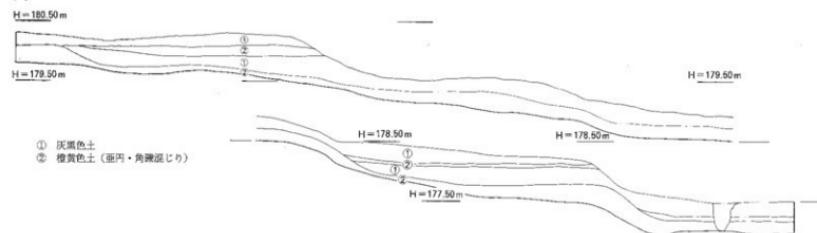
T 1



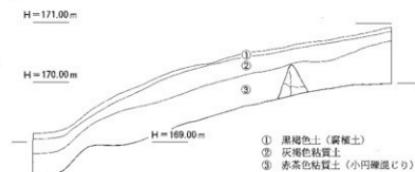
T 3



T 6



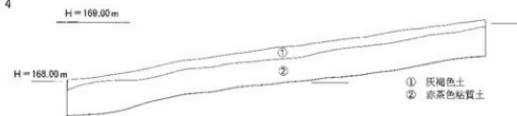
T 8



T 2



T 4

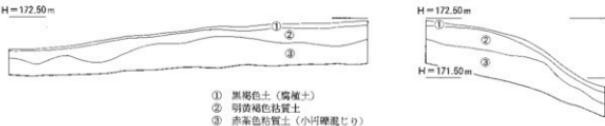


T 5



H = 179.50 m

T 7



はみられなかった。

#### 第4トレンチ（第2図）

樹園地で施肥溝が2個所認められ、スレート瓦等が入っていた。表面下10~20cmで固い粘質土に達する。遺構・遺物の検出はなかった。

#### 第5トレンチ（第2図）

尾根の先端に位置する。樹園地で施肥溝が3個所あり、ビニール片等が入っていた。土壤攢伴が著しく、遺構・遺物の確認はできなかった。

#### 第6トレンチ（第2図）

谷奥部の旧水田で梨園に転換のあと、原野状になっている。上層は灰黒色土（耕土、現水田面）、橙黄色粘質土（亜円・角小礫混り）、灰黒色土（耕土、旧水田面か）、橙黄色粘質土、茶褐色粘質土（地山）の上層変化が検出され、開田時の上盛り工程がうかがわれる。ごく小の土器片、須恵器片を最上層から採取したものの遺構の検出はできなかった。

#### (2) B区の概要

水田及び畠の中の比高20mの独立丘。現在、梨園で一部は廃園になっている。古くは神社の祀られていたところという。尾根上に河原石や小角礫があるところから、参道の敷石に供されていたものと想定されたが、土地所有者が梨園造成時に土中から掘り起したものと背稜上に並べたということである。トレンチは背稜頂部に南北方向とこれと交差して東側傾斜地にL字型、西側の緩傾斜地に2本設定し、墳墓遺構の検出を目的とした。

#### 第7トレンチ（第2図）

表面下、20~40cmで赤茶色の粘質土に達する。概観上、墳丘の形態がうかがわれたものの盛土状、あるいは版築状の土質変化は認められなかった。遺構・遺物の確認はできなかった。

#### 第8・9トレンチ（第2・3図）

表面下、20~40cmで赤茶色の小角礫を含んだ粘質土に達する。遺構・遺物の検出はなかった。

#### (3) C区の概要

B区の東側稜線にあたる。西側山裾は切削した地層が露呈している。上部はマサ化した細粒の花崗岩でその上層に火山灰をのせた状態がみられる。

#### 第10トレンチ（第3図）

水田のあとに台湾桐がまばらに植栽してある平坦地で、背部は削取された花崗岩体の急崖になっている。開田時の土盛りの状態が下方の土層にみられる。表面下20cmで小角礫混りの砂疊層に達する。耕土と砂疊層の間には、水酸化第二鉄の極薄層があり、いわゆるカナケ田ではなかったかと思われる。耕土層の上部から極小片の須恵器片3、土師器片3、

石錐1を採取したが遺構の検出はできなかった。トレンチ背部の稜線西側には谷川が流下しているところから、トレンチの一部の土層は旧河道敷とも考えられる。

#### 第11トレンチ（第3図）

C区の南端の小支稜線の尾根上にある。梨園あととの土壤攢伴の著しいところで、表面下20cmで強度の黄褐色粘質土に達する。上層から耕土—粘質土—耕土—粘質土と土壤改良に留意したあとがみられ、トレンチ上方に溝状の施肥穴がみられた。遺構・遺物の検出はなかった。

#### 第12トレンチ（第3図）

第11トレンチの北側下方に位置する。トレンチ中央に梨園境界線と考えられる段差がある。表面下20～30cmで強度の黄褐色粘質土に達する。段差部分は表面下約1mの落ちこみがあり、丘陵最下部の自然地形の地山が表われる。落ちこんだ土層の上、中、下部から若干の須恵器・土師器片と地山の表面を掘りこんだピット状の小穴1を発見し、トレンチを拡張して住居跡の検出につとめたが、遺構の確認はできなかった。

#### 第13トレンチ（第3図）

第12トレンチの北側、事業施行区域界の旧畠地の中の窪地部分にトレンチを設定した。表面下、20cmで黄褐色粘質土に達する。遺構・遺物の検出はできなかった。

#### 第14トレンチ（第3図）

緩傾斜の樹園地に設定したトレンチ。表面下、10～15cmでマサ土に達する。土壤攢伴が著しく、トレンチ内に3本の溝状肥料穴があり、スレート瓦片、消炭片がみられたが、遺構・遺物の検出はなかった。

#### 第15トレンチ（第3図）

表面下、50～60cmでマサ土に達する。緩傾斜の畠地あとで上方からの土を搔き寄せられた耕上層が厚い。遺構・遺物の検出はできなかった。

#### 第16トレンチ（第3図）

稜線の先端、舌状台地に位置する。太平洋戦争中に開校された青年学校敷地跡で梨園のあと、畠に転用されている。T字型にトレンチを設定した。橙黄色粘質土からコンクリート片、釘などが発見された。自然地形は背稜状であったものが平板状に深く削剥され整地が行なわれたものと考えられる。遺構・遺物の検出はなかった。

#### (4) D区の概要

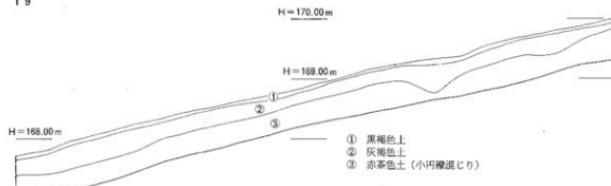
谷川を挟んで西側の急傾斜地の上の填丘状丘陵とその山麓にひろがる東面の平坦部分がある。付近には花崗岩塊が散在し、墳墓と住居関連遺跡を想定させる環境である。

#### 第17・18トレンチ（第3・4図）

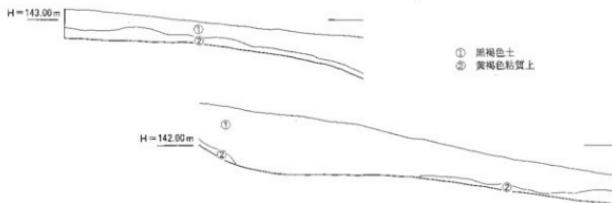
樹園地のあと畠地に転用されたところ。花崗岩塊が点在し、ほゞ平坦な地点に墳墓・住

第3図 第9~第17トレンチ実測図

T 9



T 12



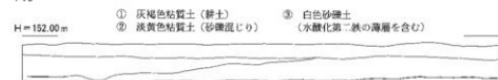
T 15



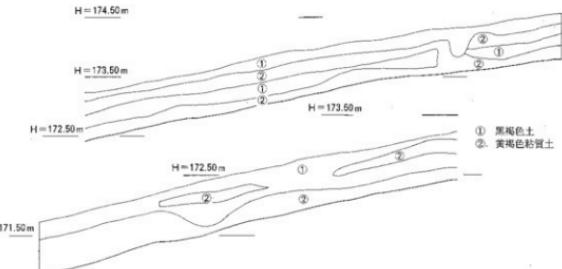
T 16



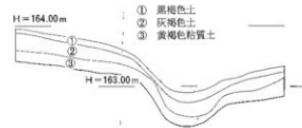
T 10



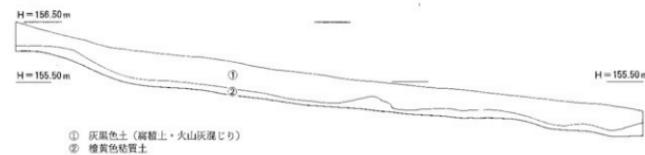
T 11



T 13



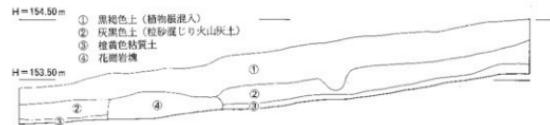
T 17



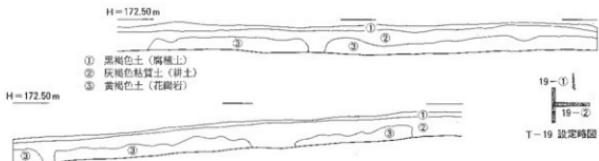
S = 1 : 20  
0 1 m

第4図 第18~第22トレント実測図

T18



T19-①

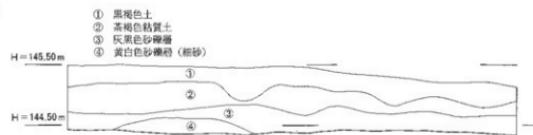


19-①  
19-②  
T-19 設定時図

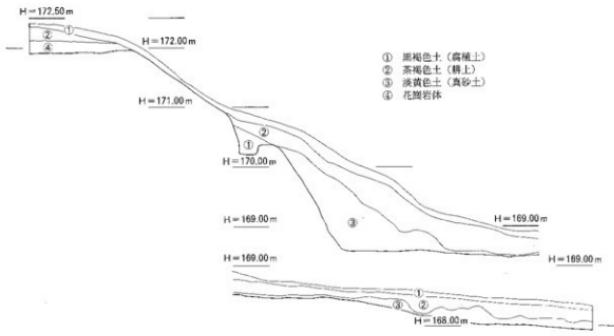
T22



T20



T19-②



S = 1 : 20  
0 [ ] m

居跡を想定してトレンチを設けた。トレンチ17では約50、同18では約90cmの火山灰土が堆積していた。表面下15~20cmで若干の須恵器・土師器片を採取したが、遺構の検出はできなかった。第18トレンチでは、花崗岩の円礫を含んだ砂粒層が存在し、旧河道敷と考えられる。

#### 第19トレンチ（第4図）

平坦な畑地面から比高20mの丘陵地。梨園廃止後、杉、松の植林が行なわれている。東側は約35°の急斜面でマサ土が露出している。墳墓遺構を想定して、頂部及び斜面にトレンチを設けた。表面下40~50cmで花崗岩体に達する。頂部で3本、傾斜地で4本の構状施肥穴が表われ、ビニール片、消炭滓等が入っていた。若干の小土器片が表上中（10~15cm）から採取されたが、まとまった状態で遺物の検出、遺構の確認ができなかった。

なお、口縁部と思われる極小土器片には6本の平行沈線が認められるものがあった。

#### 第20トレンチ（第4図）

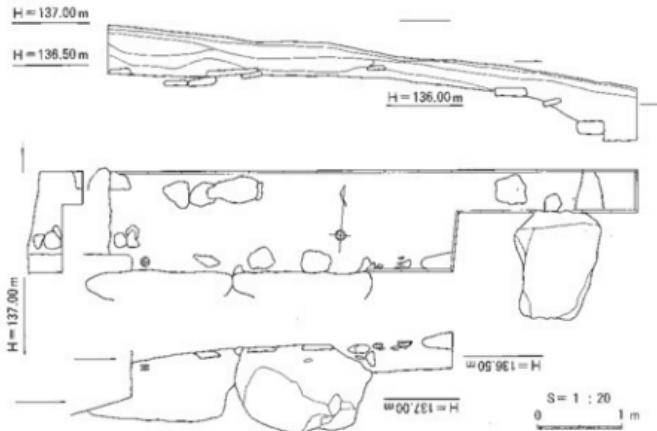
山裾にひらかれた水田であるが、樹園地に転用されている。花崗岩塊が附近に点在し、トレンチ設定時に須恵器小片を表探したところから遺構の存在を想定したが、表面下80cmで細砂層、その下約20cmで花崗岩起源の砂礫層に達し、湧水がある。溝状肥料穴が発見された。土地所有者によれば、旧河道敷に相当する一帯であるという。遺構・遺物の検出はなかった。

#### (5) E区の概要

調査対象地域の東端、農道を挟んだ北側部分にあたる。樹園地で、かろうじて山形を残しているが、南側部分は水田と畑で地形は著しい改変をうけている。

#### 第21トレンチ（第5図）

第5図 トレンチ実測図



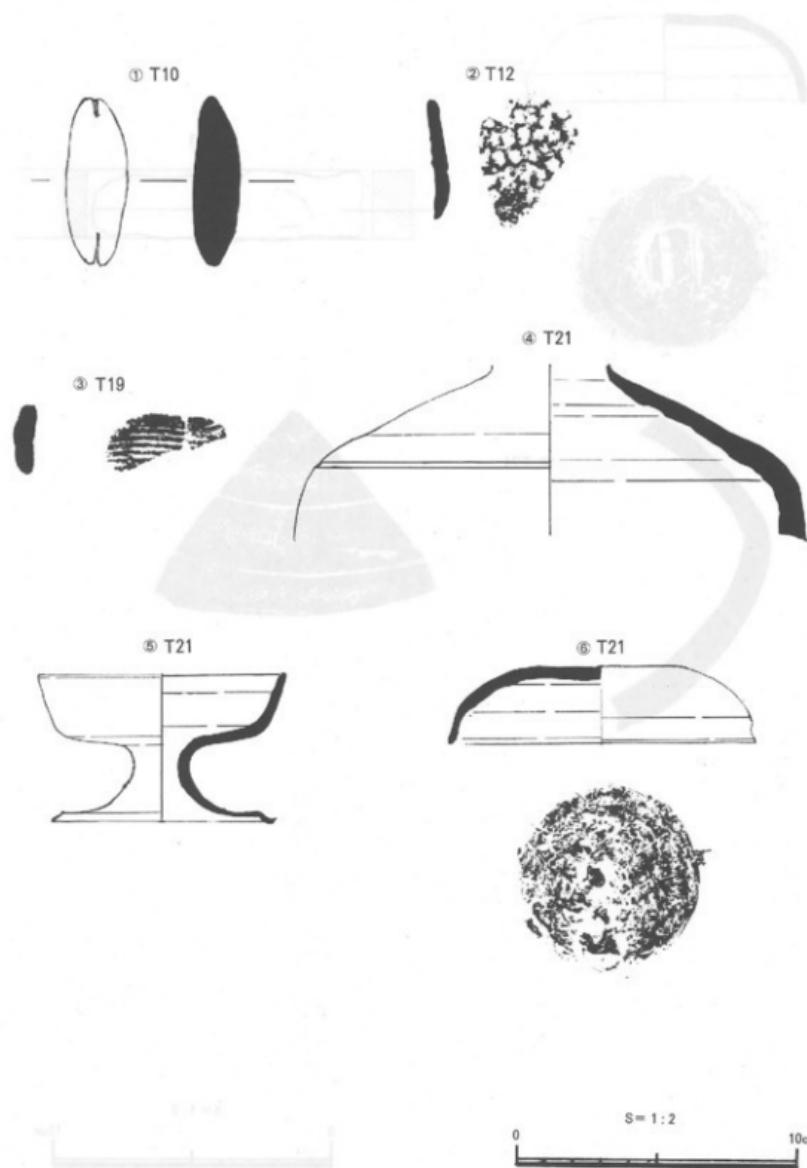
玄室部分と推定される個所にトレンチを設定した。

横穴式石室をもつ古墳で、石室はE68°Nを示し、花崗岩の側壁は内面を平板状に加工している。羨道部分は田面に急傾斜する山腹部分にあると思われる。トレンチ内は後世の焚火あとと考えれる煤のかかつた河原石と消炭滓のかたまりが3ヶ所みとめられた。地盤と考えられる橙黄色粘質土が攪拌された痕が認められ、出土遺物は茶褐色土中から検出され、著しい搅乱をうけている。橙黄色粘質土はこの層の下位にあたる。古墳築造年代は出土遺物から推定すると、器形の著しく矮小化する陶邑・II型式6段階の時期のものと考えられ、また、米子市陰田遺跡出土の須恵器編年陰田-7に相当する特徴がみられるところから7世紀中頃と推定される。

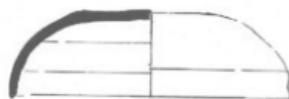
#### 第22トレンチ（第4図）

陵線の先端に位置する平坦な部分。原地形のほとんど残らないところである。廻園後、畑に転用されたところである。表面下30~40cmで赤褐色粘質土に達する。トレンチ内4個所に溝状施肥穴があった。遺構、遺物の検出はなかった。

第6図 遺物実測図



◎ T21



圖版三十一 圖三

◎ T21



EST. \*

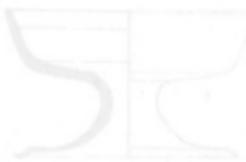
◎ T21



EST. \*



EST. \*



S = 1:2



第1表 レンチー観察

レンチ番号	大きさ (長さ×幅) 単位(m)	遺構	出土遺物
第1レンチ	9.5×1.5	—	—
第2レンチ	10.0×1.5	—	—
第3レンチ	8.0×1.5	—	—
第4レンチ	7.0×1.0	—	—
第5レンチ	6.0×1.0	—	—
第6レンチ	21.0×1.5	—	土器
第7レンチ	(6.0+3.0)×1.5	—	—
第8レンチ	6.0×1.5	—	—
第9レンチ	10.0×1.5	—	—
第10レンチ	8.0×1.0	—	石錐
第11レンチ	15.0×1.5	—	—
第12レンチ	12.0×1.5	—	土師器
第13レンチ	4.5×2.0	—	—
第14レンチ	8.0×1.5	—	—
第15レンチ	5.0×1.5	—	—
第16レンチ	(8.0+10.0)×1.5	—	—
第17レンチ	8.5×1.5	—	—
第18レンチ	10.5×2.0	—	—
第19レンチ	(15.5+14.5)×1.0	—	土師器
第20レンチ	7.5×1.5	—	—
第21レンチ	6.25×1.2	古墳の石室	須恵器・鉄器
第22レンチ	10.0×1.5	—	—

### III 小 結

試掘調査で得られた所見を以下に述べてまとめとしたい。

今回の調査対象区域は約15haの広域にわたるが、地形的に変化の著しいところで、鳥取花崗岩体によって占められる山地は一般に風化作用を強く受け「マサ」化している。

この上に大山及び起源不明の火山灰層が広くおおっている。

この地域は、古くから谷底部の開田が進み、山地稜線部は樹園地として深部まで削られている。レンチ設置前に地形の表面観察を行なって得た概念にもとづき、A及びB区では主として、墳墓の存在を想定して調査を行なった。C区にあっては、平坦部分のレンチで生活関連遺構の確認を、D区においては、丘陵頂部に墳墓遺構、平坦部分で住居跡等の遺構確認を推定して深層までレンチを掘り下げたが検出できなかった。E区では、古墳1基の確認を得て、近接地に古墳の存在があったのではないかと推定したものの、著しい地形変化のため、他の古墳の検出はできなかった。

今回の調査で、以上の所見が得られ、所期の目的は充分達成されたものと考えられる。

発掘調査から報告書作成にいたるまで、多くの方々によるご協力とご教示をいただいた。厚くお礼を申しあげるとともに記して謝意に代えたい。

## 土師百井廢寺遺跡

## I 発掘調査にいたる経過

土師百井廃寺跡は、昭和6年国指定史跡になった後、昭和53年、54年の2次にわたる発掘調査で築地、講堂、金堂、中門、回廊跡等が確認された。土師百井地区道路改良工事に伴う今回調査では、前二回の調査結果をふまえ、事業に直接関連する地点を対象として、伽藍配置推定図に基づき、中門南側、南築地及び南西隅築地の三ヶ所にトレントを設定した。発掘調査面積は22m<sup>2</sup>である。

発掘調査は、平成4年8月5日から9月1口まで現地作業を行ない、整理、報告書作成作業を10月30日までに完了した。調査にあたって、多くの方々のご協力とご指導を得たことに深く感謝を申し上げるしだいである。

調査協力 郡家町同和対策室 烏取県教育委員会文化課 烏取県埋蔵文化財センター  
作業協力 清水好夫、田中政明、新竹忠三、田渕美道、若林久雄、道谷美賀子

## II 調査の概要

### (1) トレント調査の概要

#### 第1トレント（第7図）

中門の南、約7m地点。町道の法敷の下段の畑地で、中門のある段丘面から約2.5mの高低差がある。道路からの敷均し砂利と高位置からの上砂の崩落により、中凹疊混りの黒褐色土が1m近い層をなして、瓦片を包含した暗赤褐色粘質土を厚く蔽っている。

遺物包含層直下に石材、または、焼き固め、あるいは、踏み固められた遺構の検出はなかった。遺物出土量が極めて少なく、平瓦の極小断片（5×5cm程度、25片）、丸瓦4片、瓦当（3×3cm1片）の出土にとどまった。

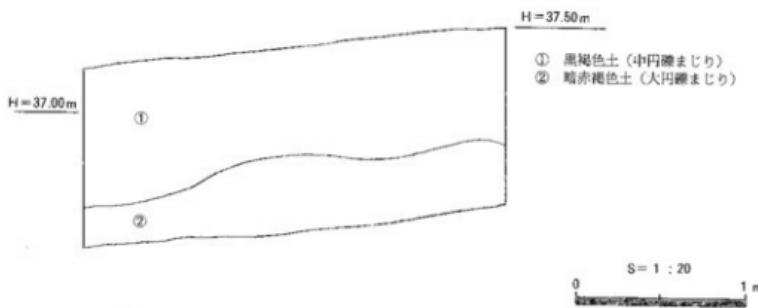
#### 第2トレント（第9図）

寺域南面の築地推定線を含めて、町道に平行した南北方向に設定したトレント。町道法敷直下の畑地は、敷均し砂利を多量にまじえた耕上層から50~70cmで暗赤褐色粘質土の遺物包含層に達する。遺物包含層の直上の土層は北側に薄く南側に厚い。南側にみられる堅くしまった中円・角礫層（層厚10~15cm）の暗赤褐色土は北側ではみられない。

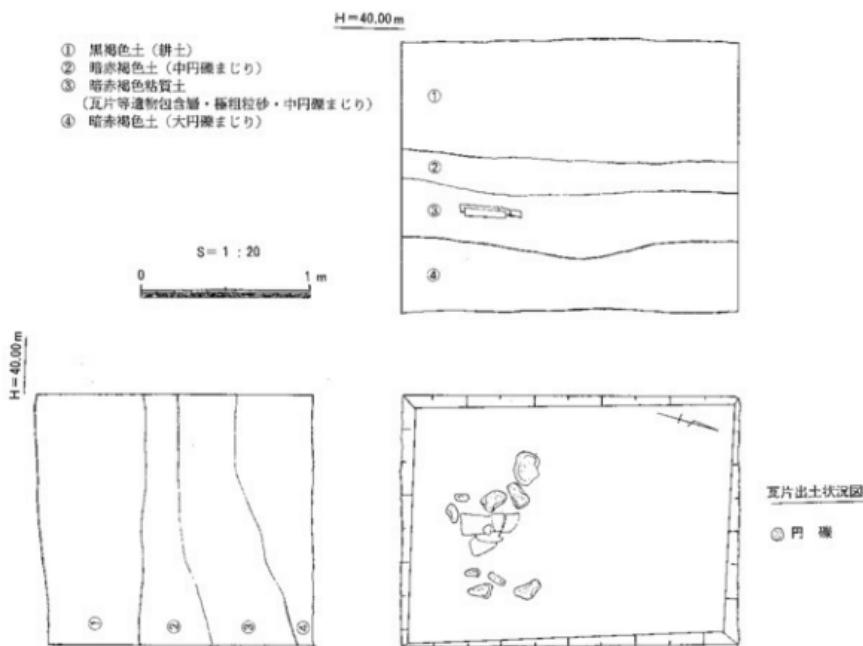
寺域推定線付近の土層に留意したが、石列、タタキ等の遺構の確認はできなかった。

トレント中央部の表上下、75cmから長径130cm（検出部分）短径190cm、厚サ45cmの平板状礎石が検出された。礎石は、遺物包含層を中心にして3層の間にあるが、最下層は中円

第7図 第1トレンチ実測図



第8図 第3トレンチ平面、土層実測図



礫と極粗粒砂で、一見、搗き固められ、石の直下は周間に栗石様の円礫が敷かれていた。出土遺物は、大量の平瓦、丸瓦片および、瓦当（1片）須恵器（4片）土師器（1片）である。

### 第3トレンチ（第8図）

寺域推定線の南西隅に町道と平行して畠地に設置したトレンチ。層厚70cmの耕土の下層暗赤褐色土が遺物包含層を蔽う。こゝでは遺物包含層は標高31m地点である。遺構検出はできなかった。出土遺物は極端に少なく、丸瓦2個体（13片）平瓦2個体（17片）である。

#### （2）出土遺構・遺物

##### イ. 磐石（第9・11図）

塔心礎から南西方向（N159°W・69m）地点。推定寺域の南限付近に設定したトレンチの中央部から平板状の石が検出され、既に露呈している南限域付近の二つの石との関連性について注目された。礎石の一部は、現在、供用道路の敷地内に入りこんでいるため、全体の検出ができなかったものの、長径の未確認部分はなお、1m内外が測られる。

- 3体の石は、寺域南面と平行して、一線上に位置し、高低差は20cm程度の相違である。
- 石の間隔は東から6.5-30mが測られる。礎石の性格は今回の発掘調査では判断することはできなかったものの、今後の調査の一つの手がかりともなるのではないかと考えられる。

##### ロ. 軒丸瓦（第12図-③）

軒丸瓦は、瓦当部分の小片（第1・2トレンチ）2片が出土した。これは、既報の土師百井式（重闇文八葉素弁蓮花文）第1様式のものと考えられる。瓦片にまじって出土したが、土師質の軟かい焼成で、摩耗著しく、圖文・中房を欠き、花弁の稜線も損耗している。とくに第1トレンチ出土のそれは、極小片でつくりが全く判別できない。胎土は石英を含んだ細砂粒が多く、荒い。

##### ハ. 平瓦（第12図-⑥）

側面に布目痕がみられるものと側面ヘラ削りの外面模骨痕のあるものの2種類があり、焼成度の弱い土師質の赤色系統と、焼成度の強い須恵質の堅硬な青灰色がある。既報の1枚づくり、4枚づくりと考えられる出土数は、4枚づくりのものが圧倒的に多い。第1トレンチで出土した平瓦は小断片でつくりの判別できないものの、すべてが焼成度の弱い軟

質のものであった。第2トレンチ出土のものは硬質が多くみられ、第3トレンチのそれは、2個体分であるが軟質である。

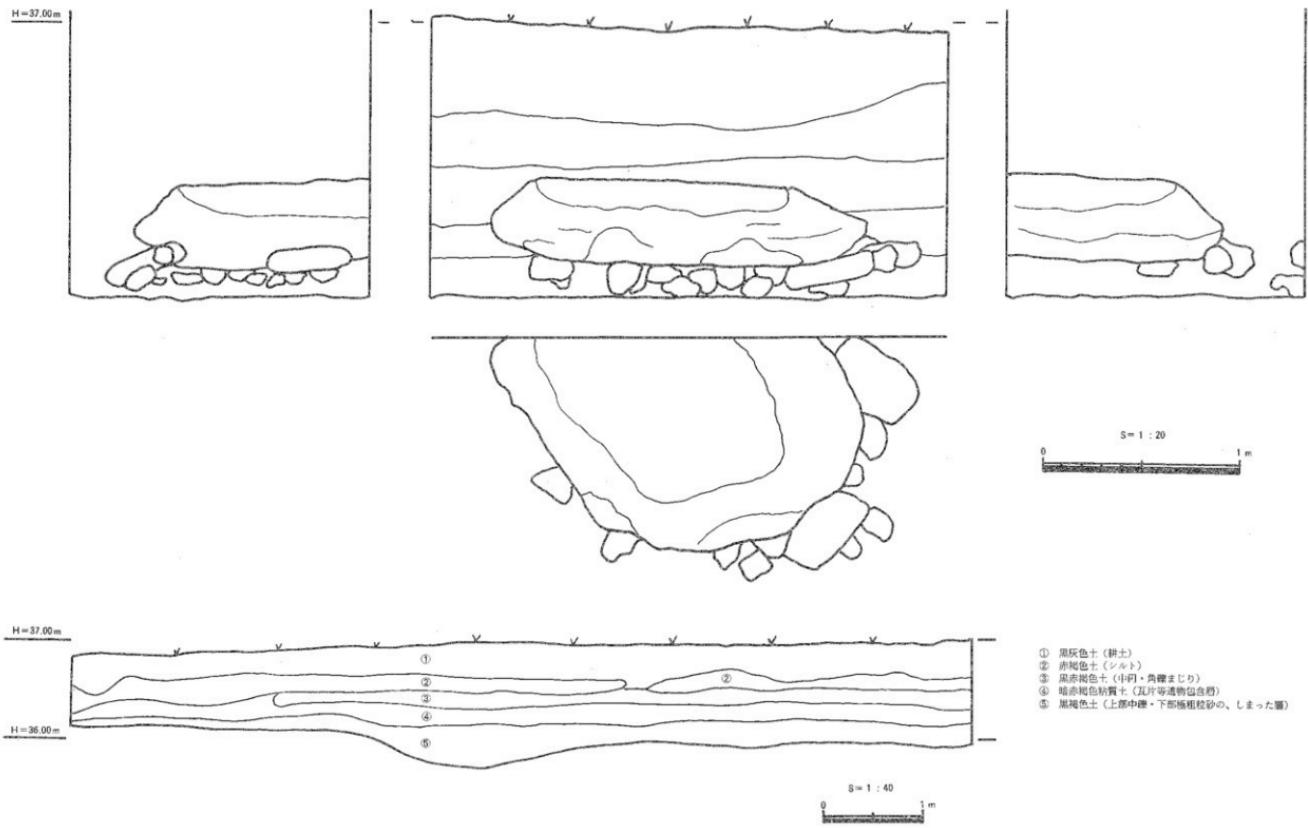
## ニ. 九 瓦 (第12図-⑦。⑧)

外側を磨り消したものと、ハケ引きしたものとの2種類に分けられる。第1トレンチのそれは、外側ハケ引き、裏側は細かい布目痕のある赤色系統のもので、胎土は細砂を含みある程度精選されたものである。第2トレンチの丸瓦は、裏側は、細かい布目痕、外側は、スリ消し成形を施した焼成度の強い須恵質の堅硬で青灰色のものが多い。第3トレンチのものは、やゝ大型で粗い布目痕が裏側にみられるが外側は摩耗著しいため成形手法は判別しにくいが、おそらくスリ消しが施されたものようである。軟質で淡灰色、胎度は荒い砂粒も含まれている。

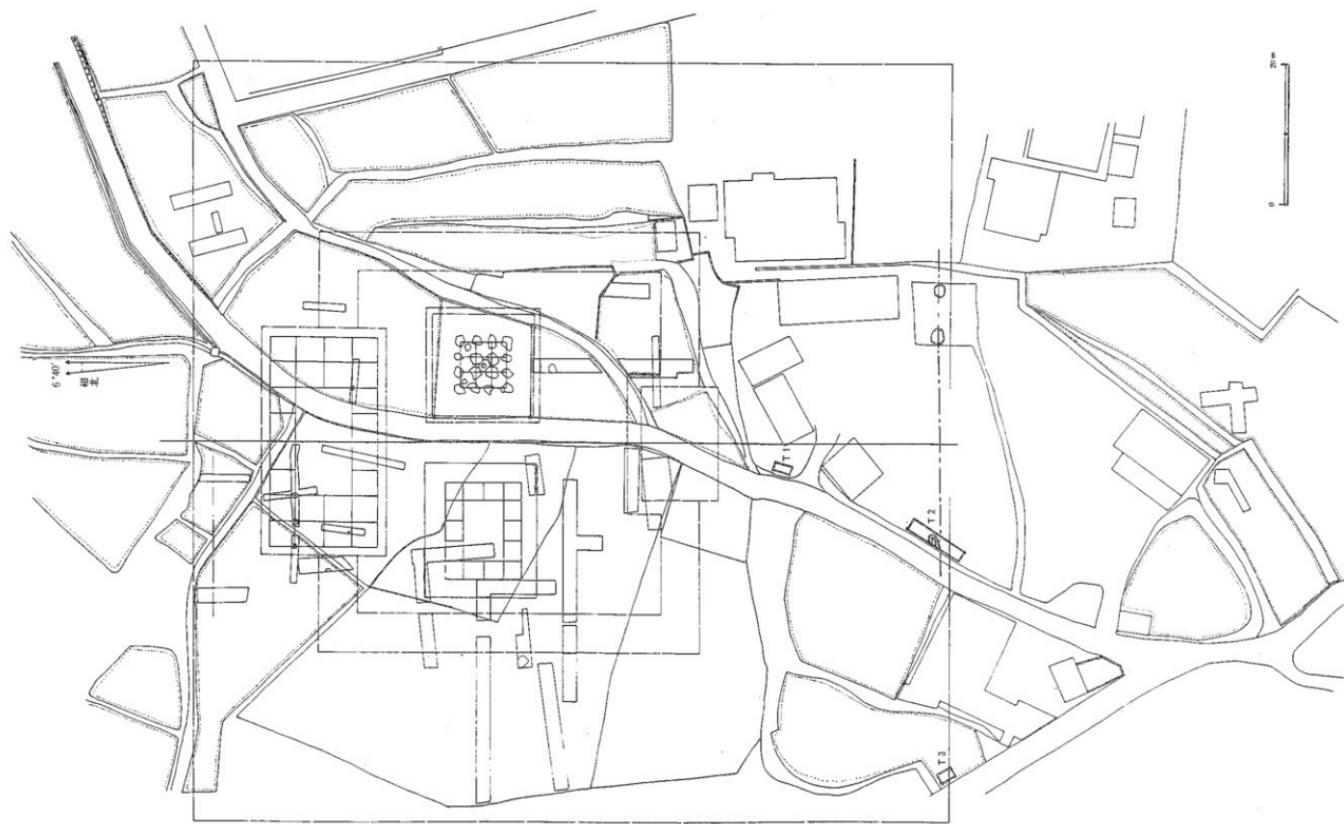
## ホ. 土 器 (第12図-①。②)

須恵器蓋杯の蓋の一部と、土師器壺の口縁部の小片と、器種不明の須恵器の極小片1がある。いずれも第2トレンチ出土のものである。須恵器は蓋の天井部 $\frac{1}{4}$ 程度の大きさで、扁平なつまみの中心部はくぼみをもつ縁片部を欠いたもの。摩耗が著しく判別困難であるが、内面をロクロナデ、外面ロクロヘラ削りと思われる。細砂粒を含む胎土で、焼成堅硬、青灰色を呈している。土師器は壺の口縁部と考えられるが、著しく摩耗しているため、手法はわからない。口縁部は外反気味に外傾、口唇端は先細り。胎土は細砂粒を含む。

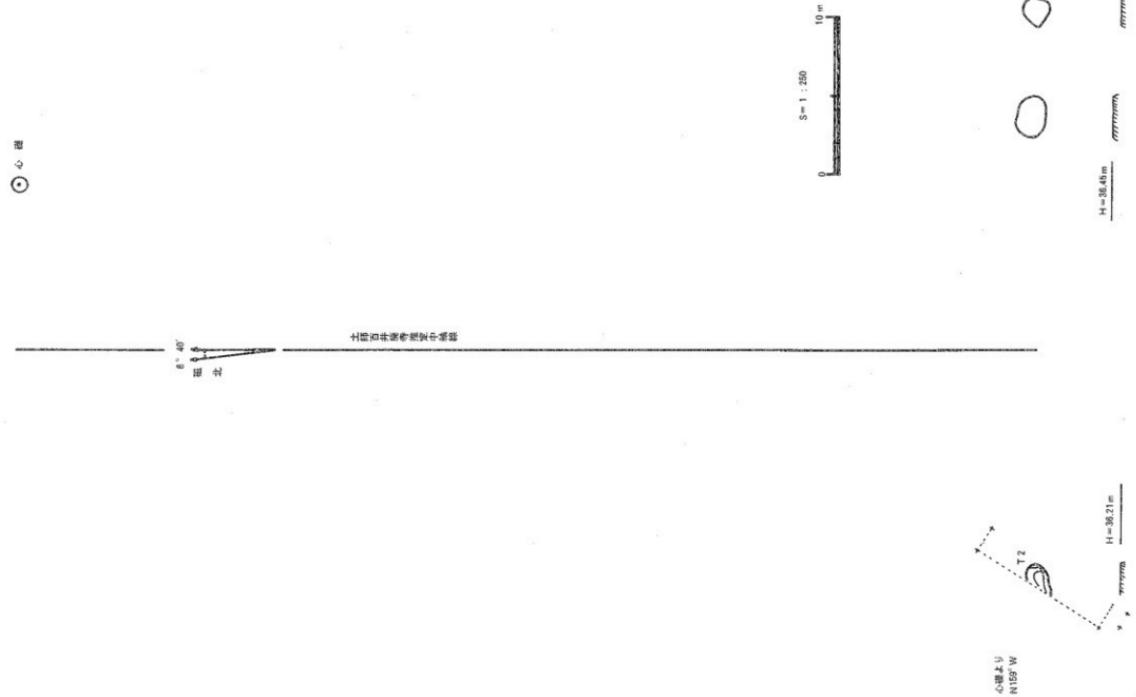
第9図 第2トレンチ壁面・土層実測図



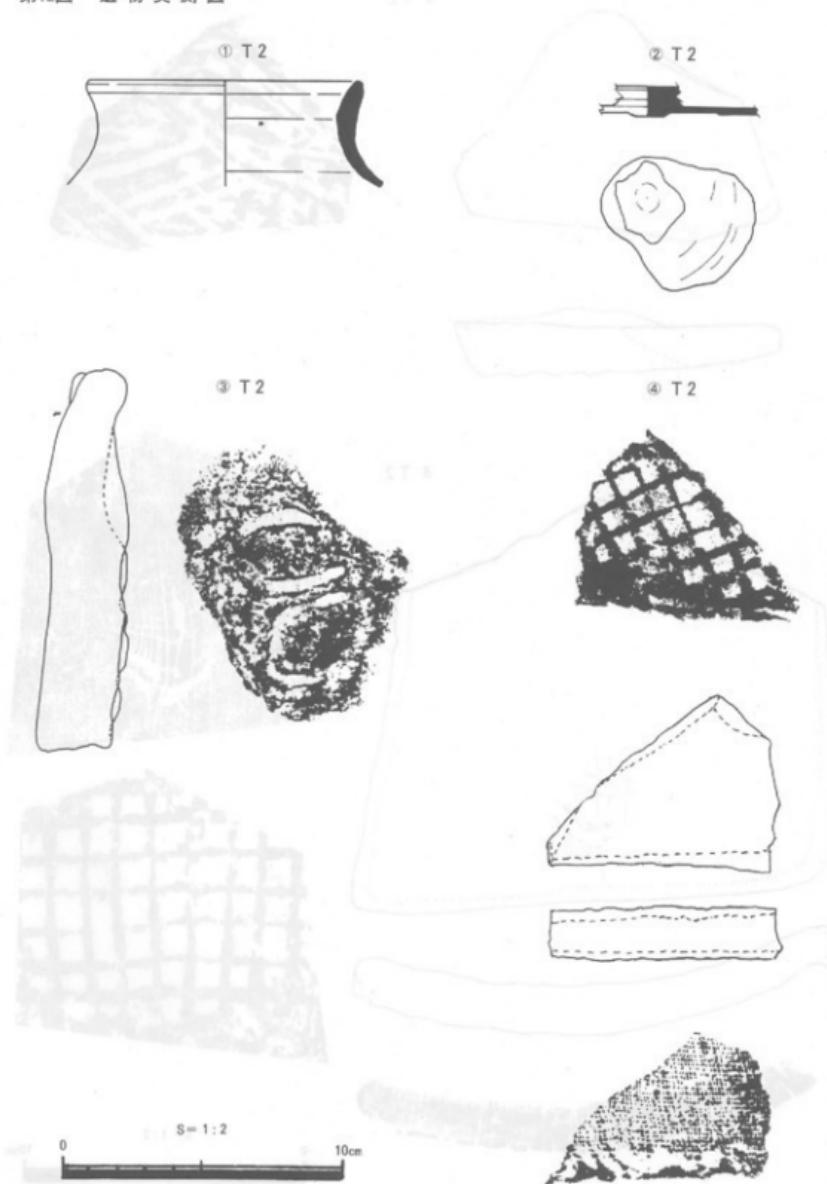
第10図 土師百井廃寺跡 トレンチ位置及び伽藍配置推定図



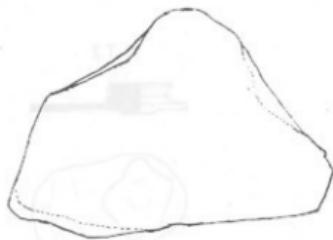
第11図 出土磁石位置図



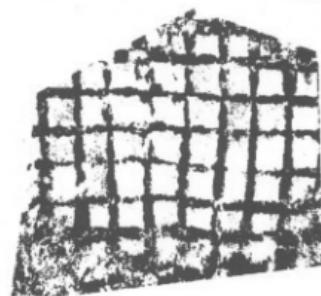
第12図 遺物実測図



⑤ T 2

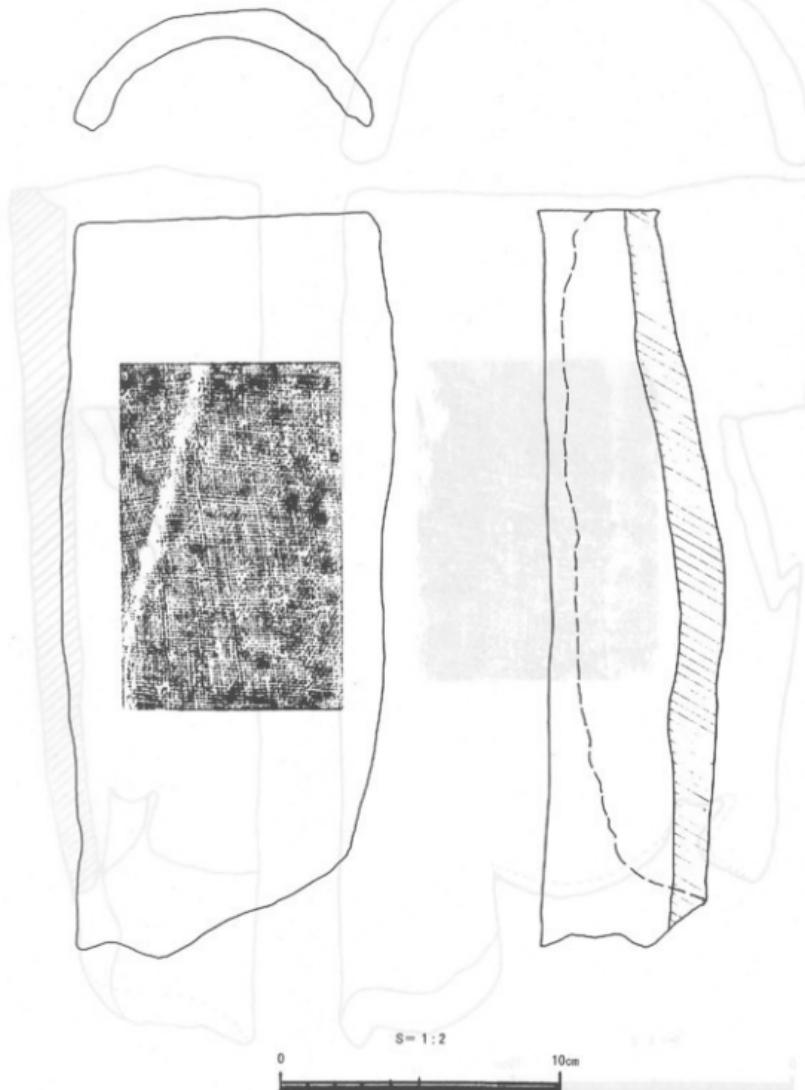


⑥ T 2

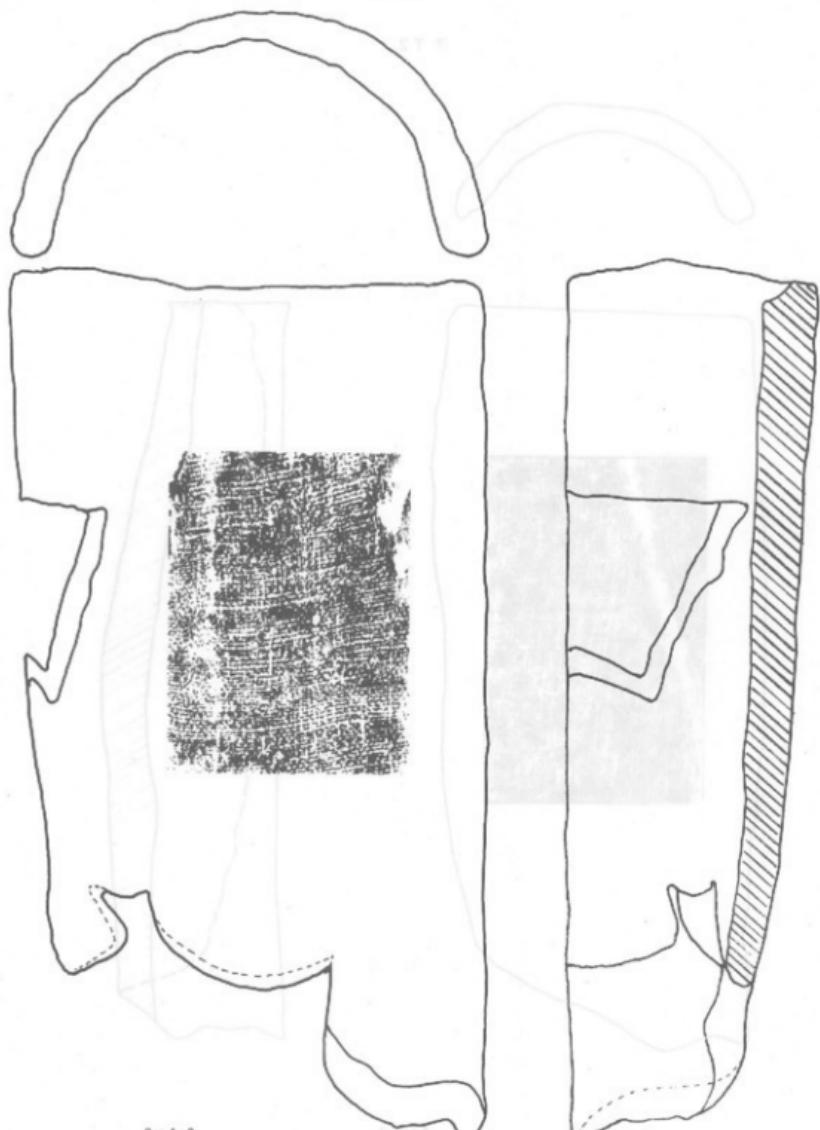


0 S = 1 : 2 10cm

② T 2



⑥ T 3



S = 1 : 2

0

10cm

### III 小 結

地元の畠耕作者をはじめ、多数の方々のご協力を得て、調査を終了した。限られた小範囲の調査であったが、得られた結果の所見を以下に記してまとめとしたい。

1. 今回出土の遺物は既報の出土遺物の域にとどまり、中世の慈住寺に関連する遺物の検出はできなかった。詳細な分析はできないものの、トレンチごとに、異なった様態をうかがわせる遺物を包含しているように思われる。
2. 磁石の性格についてはなお、今後の調査の積み重ねで解明されるものと考えられるが、検出地点の土層を中心に以下の考察を行なった。第2トレンチ内の層準は、上部から耕土、シルト層、暗赤褐色土層、粘質土層、黒褐色土層と重ねられ、かなりの深部まで河原火山岩層の堆積が考えられ、円通寺砂岩・礫岩層と称される基盤層の面までトレンチを掘り下げることはできなかった。耕土層は砂礫が大量に含まれ、明らかに道路の路面補修による川砂利の道路面からの落ちこみが考えられる。第3層の中円・角礫まじり暗赤褐色上層は10cm程度の薄層であるが、多量の礫でかなり堅くしめられていた。この層は、瓦片等を包含した直上にあって、廃寺以後のものと思われる。第4層の遺物包含層にみられる瓦片は一見、割られたという感じの小片で多数をしめていた。礫石は石厚の約半部とこれを支える栗石の一部が、この層に位置していることを考えると創建当初の遺構ではないともいえるかもしれない。

# 図 版

(別 府・下 津 黒 地 区)

図版 1

1



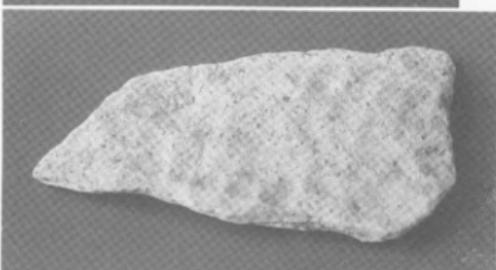
T 6 出土遺物

2



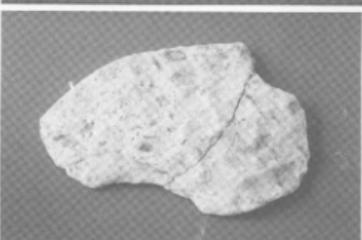
T 10 出土遺物

3



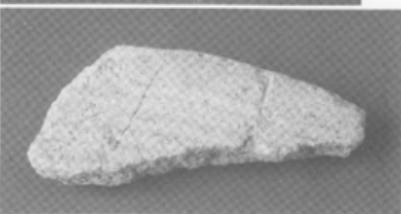
T 12 出土遺物

4



T 12 出土遺物

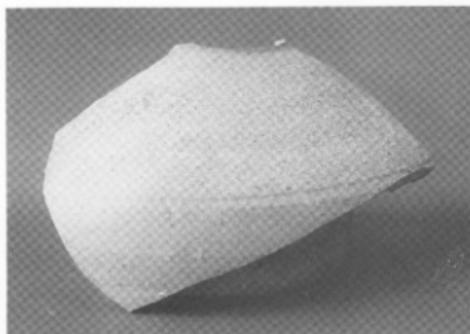
5



T 19 出土遺物

図版 2

6



T21 出土遺物

7



T21 出土遺物

8



T21 出土遺物

9



T21 出土遺物

10



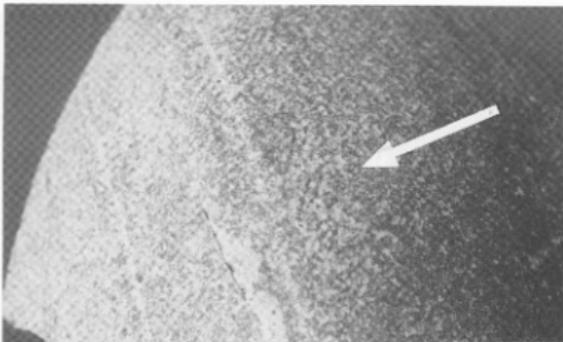
T21 出土遺物

11



T21 出土遺物

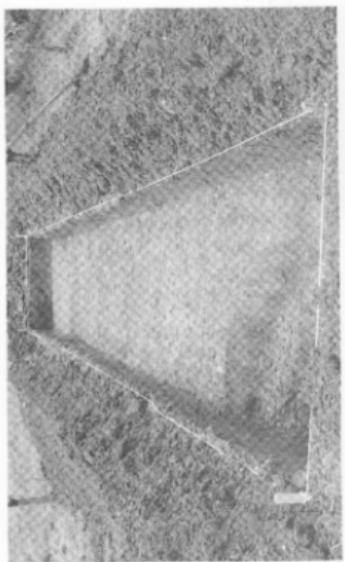
12



上写真遺物  
波状紋



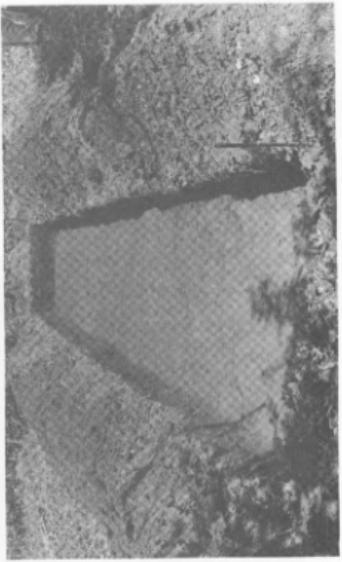
1. A区遺跡（北より）



2. T1完掘状態（北より）



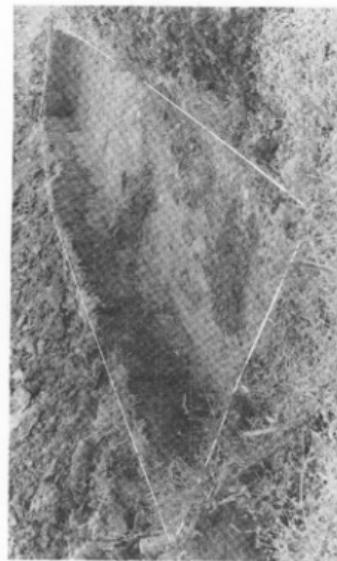
3. T2完掘状態（南より）



4. T3完掘状態（南より）



1. T 4 完掘状態（南より）



2. T 5 完掘状態（南より）



3. A区、T 6 調査前遠景（北より）



4. T 6 完掘状態（北より）

図版 6



1. B1区遠景(西より)



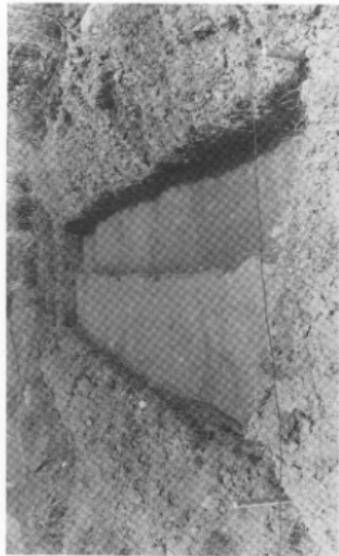
3. T7元掘状態(西より)



2. T7元掘状態(南より)



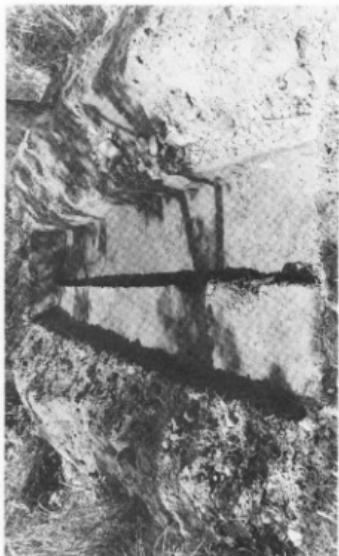
4. T8元掘状態(西より)



2. C・E区遠景（北より）



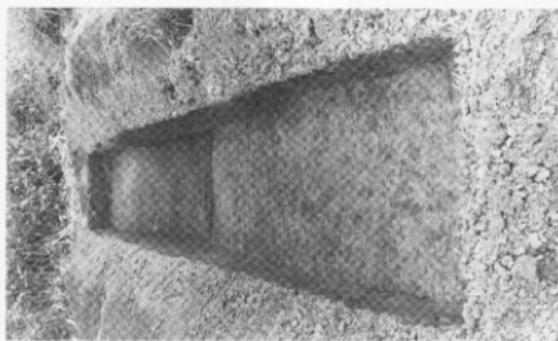
3. T10完掘状態（南より）



4. T11・T12測定前遠景（北より）



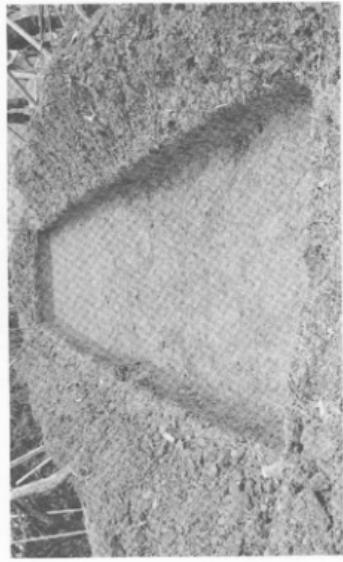
1. T11完掘状態（南より）



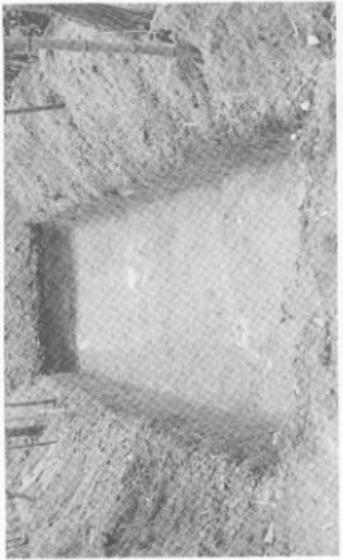
2. T12完掘状態（南より）



3. T13完掘状態（南より）



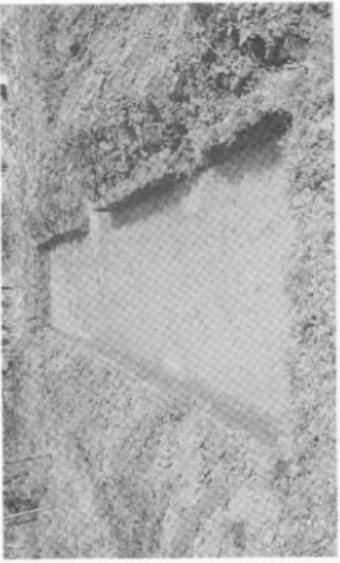
1. T14完掘状態（南より）



2. T15完掘状態（南より）

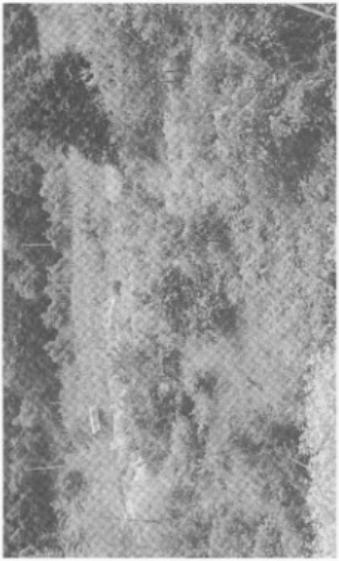


3. T16完掘状態（南より）



4. T16完掘状態（西より）

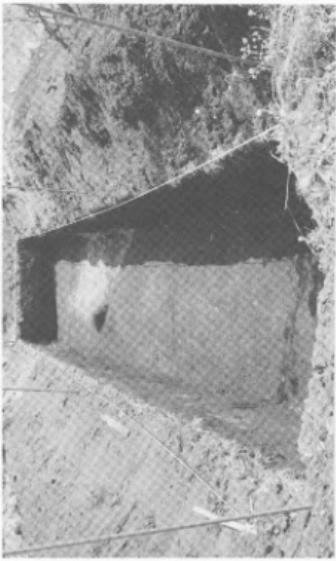
図版 10



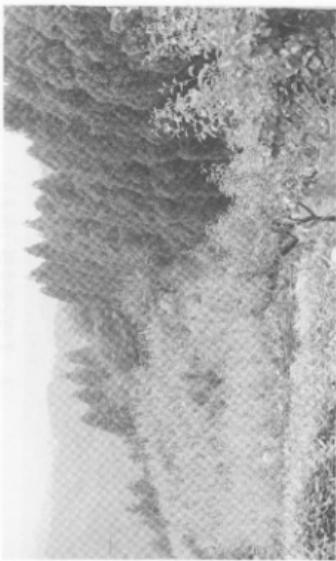
1. D区、T17・T18調査前全景 (西より)



2. T17完掘状態 (南より)



3. T18完掘状態 (南より)



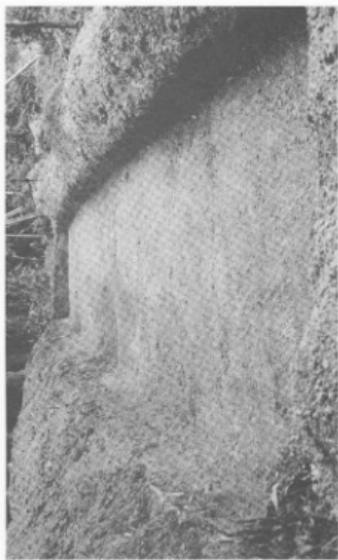
4. D区、T19調査前遠景 (南より)



3. T19完結状態(西より)

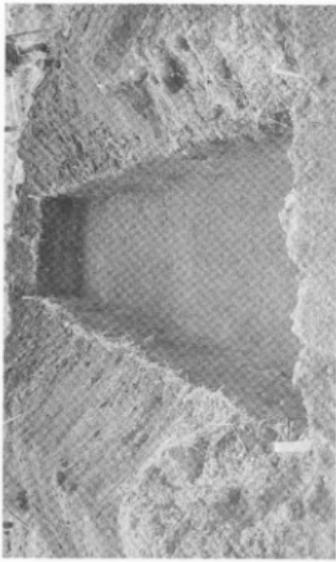


1. T19完結状態(南より)



2. T19完結状態(東より)

図版 12



1. T20完掘状態（南東より）



2. T21調査前全景（北西より）



3. T21完掘状態（西より）



4. T22完掘状態（南より）

# 図 版

(土 師 百 井 地 区)

図版 13

1



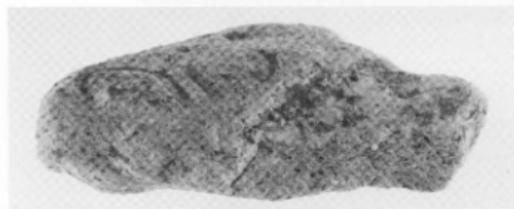
T 2 出土遺物

2



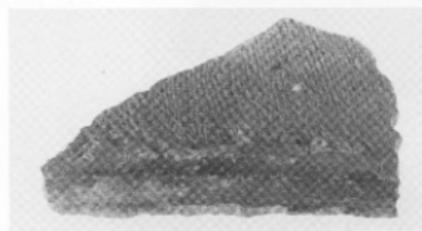
T 2 出土遺物

3



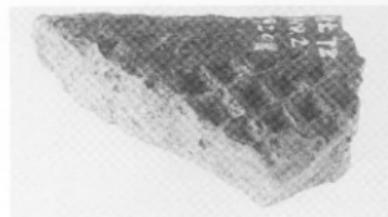
T 2 出土遺物

4 -①



T 2 出土遺物 (表)

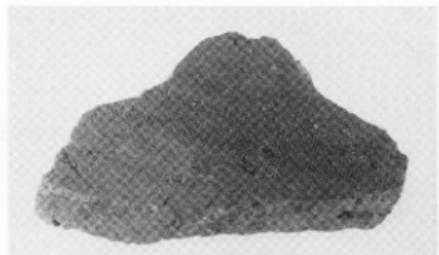
4 -②



(裏)

図版 14

5 - ①



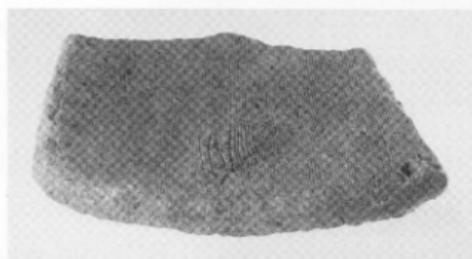
T 2 出土遺物（表）

5 - ②



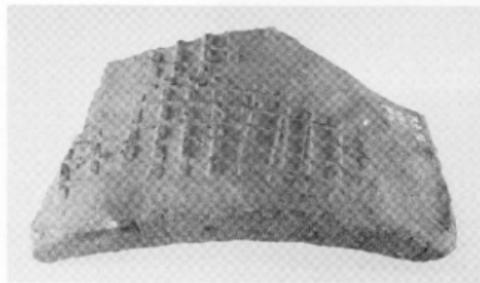
〃 (裏)

6 - ①



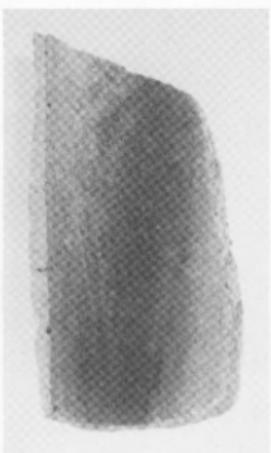
T 2 出土遺物（表）

6 - ②



〃 (裏)

7-②



(裏)

7-①



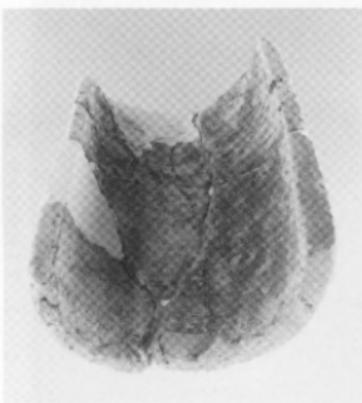
T 2 出土遺物 (表)

8-①



T 3 出土遺物 (表)

8-②



(裏)

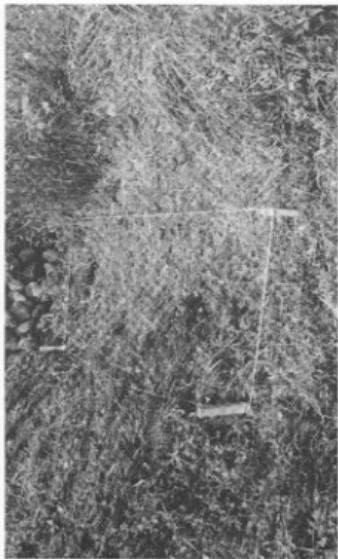
図版 16



1. T 1 発掘前全景（南より）



2. T 1 完掘状態（南より）



3. T 2 発掘前全景（北より）



4. T 2 山土礫石（真上より）



1. T 2 出土礫石（南より）



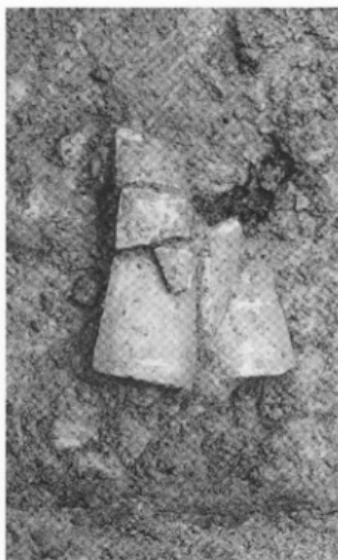
2. T 2 出土礫石（北より）



3. T 2 完施状態（北より）



4. T 3 発掘前全景（南より）



2. T3出土遺物（北東より）



1. T3完掘状態（北より）

---

---

郡家町文化財報告書15

別府・下津黒遺跡群発掘調査報告書  
土師百井廃寺遺跡発掘調査報告書

発行 1993・3

発行者 郡家町教育委員会  
鳥取県八頭郡郡家町郡家 493 番地  
TEL (0858) 72-0201 (代表)

印刷 日ノ丸印刷株式会社

---